

松花堂美術館 令和7年 春季展

わたしの好きな赤膚焼

奥田木白とうまし奈良のやきもの

令和7年4月5日(土)～5月18日(日)

前期：4月5日(土)～4月27日(日)

後期：4月29日(火・祝)～5月18日(日)



大和画酒瓶 奥田木白 個人蔵

さあ、古赤膚焼の世界にようこそ！

江戸時代初期の茶人小堀遠州は、十歳の時、郡山城内で関白秀吉、大納言秀長と利休の茶会をふすま越しに眼にした。少年遠州の息詰まる胸の鼓動はどれほど激しく波打ったことであろう。鮮烈なその茶会の日々の記憶は生涯、遠州の心に刻み付けられたはずである。父新介政次が郡山城主大和大納言豊臣秀長に仕えたことから、遠州は少年期を郡山城内で暮らしている。それゆえに遠州は、郡山の焼き物であった赤膚焼に思い入れが深く、また大和への憧憬を生涯持ち続けていたので、後の世に遠州ゆかりの窯として定められた遠州七窯にも遠州の刻印と、詳細な記述をそえて、ゆかしく最後に、赤膚焼の名が挙げられているのである。



春日御水茶屋火打焼皿 部分

次に赤膚焼に於いて、名の残る井上治兵衛、青木木兔など、名匠が輩出するのは、江戸中期、柳澤三代藩主保光(後の堯山侯)の時代である。柳澤家は、五代將軍綱吉のお側用人として仕えた柳沢吉保の直系で、学問芸術に、ことさら造詣が深いことで知られる家柄である。保光は、藩の識者、豪商たちを集め茶道など芸術文化を愉しむ風雅サロンを開いたので、超一流の茶道具類、郡山藩に生み出すこととなった。また同時に、藩内の殖産興業にも尽力して殿様のお庭焼きにとどめず、赤膚焼を郡山の産業と成すために、庶民の日常生活雑器を生産することを、おおいに奨励した。

しかし何はさておき、その堯山侯亡き後、幕末から明治初年にかけて活躍するのは名工、奥田木白である。木白は時代の読み取りが早く、また芸術の真髄を見抜く力も卓越し、中国、朝鮮の茶陶類、日本の国焼きの数々など、あらゆる焼き物をいとわず、独自の努力と研鑽を重ねて、しこれらの作品は、木白の天賦の才能に裏打ちされた木白の芸術性の心情を映し入れて、木白独自の生彩を放ち、本歌を凌ぐ味わいである。また言わずもがな、木白独創の作品には、大和絵の意匠をはじめとして、奈良の歴史と風土を香り立たせた純朴な萩釉茶陶類などがあり、現在にまで続く赤膚焼の人気作品の基を築き上げたのは、紛れもなく奥田木白その人である。

(辻井由紀子『古赤膚焼 只楽し』『さあ、古赤膚焼の世界にようこそ！』より一部抜粋)



鹿絵火打焼皿 部分